

- 2027 Gerald Malcolm Durrell 『私の動物園』小野章訳（評論社、1977年、児童図書館文学の部屋）

原題: A Zoo in My Luggage.

---

カメルーンの森林は鏡にうつった国に似ている。目標は目の前にあるように見えて、近づくともう位置がかわって少しも近づいていない。時々『鏡の中のアリス』のように、目標に近づくために、目標と反対の方向に歩かなければならないこともある。

---

p. 67

- 2028 Philip José Farmer 『果しなき河よ我を誘え』岡部宏之訳（早川書房、1978年、ハヤカワ文庫SF）

原題: To Your Scattered Bodies Go. 4巻からなる「リバーワールド」シリーズの第1巻。なお、アリス・プレザンス・リデル・ハーグリーブズ夫人は、シリーズ全体の主要登場人物の1人。

---

かれは、ハーグリーブズ夫人を、じっと見つめて、首を振り、言った。「お名前は、アリスですか？」

「まあ、そうですわ！」彼女はにっこりした。そして髪があろうとなかろうと、彼女は美しく見えてきた。「どうしてご存知ですか？ おめにかかりましたかしら？ いえ、そんなことございませんわね」

「アリス・プレザンス・リデル・ハーグリーブズさん？」

「はい！」

---

p. 34-35

- 2029 Northrop Frye 『批評の解剖』海老根宏・中村健二・出淵博・山内久明訳（法政大学出版局、1980年、叢書・ユニベルシタス）

原題: Anatomy of Criticism.

---

『アリス』の白い騎士（『鏡の国のアリス』の登場人物）は、万事にそなえなくてはならぬと考えていて、鯨に噛まれないために馬の足に小さな沓を履かせてやるのだが、彼こそは純粋な空想として通用するだろう。しかし彼がやがてワーズワスの巧みなパロディ（ワーズワスの「姪採りの老人」のもじり詩）を歌いはじめると、われわれは諷刺の鋭い刺すような匂いを嗅ぎとる。そして、われわれが白い騎士をよくよく見なおすと（この文章そのものがルイス・キャロル『シルヴィとブルーノ』の「気狂い庭師の歌」の文句のもじり）、ドン・キホーテにも、喜劇のなかの術学者にも密接なつながりがあることに気づく。

---

p. 313

- 2030 Mark Gayn 『ニッポン日記』上、井本威夫訳（筑摩書房、1951年）

原題: Japan Diary.

---

軍政部の首脳將校たちに逢って、食糧問題や淫賣宿や地下組織やキャベツと王様など、あらゆる話題を話し合った。（訳註 キャベツと王様＝『不思議の国のアリス』に出て来る話）

---

p. 43